はちまんだい

八郎潟町 真坂 **八幡台**（はちまんだい）

1.　はちまんだい

今は、八郎潟干拓のために削り取られて跡形もないけれども、八幡岱（たいたい）(岱＝神を祭った山地)と呼ばれて明治の小祠（しし）合祀（しし）までは八幡様が鎮座し、近世村落においても村の聖地であった。

(1981年 新野直吉著 古代史上の秋田)

2.　はちまんだい

「岱」daiは泰山の別称。岱宗、岱岳とも呼ばれる。

(1988年11月 蔡さん談)

はちろうがた

八郎潟 町（はちろうがた）

1.はちろうがたまち

八郎潟町は昭和31年、面潟村と一日市町が合併して誕生した町。八郎潟町の町政白書によると「悠久幾千のいにしえから紺碧をたたえ静寂な八郎潟。栄枯盛衰の中、私たちの大地は八郎湖畔に位置し、産業も文化も八郎潟とともにあゆんできた。今、八郎潟は干拓され、美田に変貌せんとしている。この湖を愛惜し、往古からの歴史を象徴し両町村が合併するにあたり 八郎潟町と命名する。」とある。日付は昭和31年9月30日。大潟村の玄関口でもある。

昭和30年代の干拓工事までは滋賀県の琵琶湖に次ぐ日本第2の湖で、以前は 琴の海、八龍（はちりゅう）(竜)湖、八郎湖とも呼ばれていた。古来、景勝の地として知られていた。八郎潟の八郎という名前は十和田湖、八郎潟、田沢湖を舞台にした三湖伝説の主人公、八郎太郎に由来する。三倉鼻の麓、国道7号線側に三湖伝説に由来する八龍神社が祭られている。

もともと男鹿半島は男鹿島であった。北側の米代川、南側の雄物川（おものがわ）、馬場目（ばばめ）川からの堆積物で南北が浅くなり、寒風山の噴火や幾度かの地震で湖岸の隆起もあって現在の湖となったといわれる。江戸時代中期の菅江真澄（すがえますみ）の絵や明治初期の蓑虫（みのむし）山人の描いた絵を見ると、船越（ふなこし）と天王（てんのう）の間は今よりもずっと開いており、湾状になっている。菅江真澄より少し前の時代の古川古松軒（ふるかわこしょうけん）の書いた『東遊雑記（とうゆうざっき）』によると、江戸時代には八郎潟がすでに淡水化していたことが伺える。

2.　八郎潟町

現　況

〔成立〕昭和31年(1956)9月30日、一日市町と面潟村の合併により成立〔面積〕16km2〔人口〕8,069人〔地形図〕五城目町〔町の木〕サカキ〔町役場〕〒018-1616秋田県南秋田郡八郎潟町字大道80番地〔町名の由来〕町の歴史を支えてきた八郎潟による。

立　地

馬場目川沖積地　八郎潟東部に開けた湖東平野に位置し、大部分が馬場目川によって形成された沖積地の水田地帯で、海抜3～4mの平坦地である。古くから川の氾濫と湖水の大波によっで悔まされてきたが、最近はその不安はない。町の東北端に筑紫岳(98m)・高岳山(221m)・森山(325m)がそびえ、山本郡との境をなす。古代から郡境界を画す山として歴史的に大きな役割を担ってきた。山地は面積の27%(うち75%が国有林)だけである。町の中央部を南北に国鉄奥羽本線と国道7号(羽州街道)が通り、交通は至便である。八郎潟駅は湖東部の商都五城目町の入口であるが、大潟村成立後は大潟橋架橋とともにその玄関口ともなり、駅前は近年とみに発展している。面積は県内で2番目に小さいが、人口密度は県内第2位の高率というのが現況である。

沿　革

〔原　始〕

高岳山麓の遺跡縄文遺跡として、高岳山南麓の沢